

2021 年 7 月 11 日（日）「何を見て生きているか」

《聖書協会共同訳》コヘレトの言葉 10:16-20

16 王が若者で、高官たちが朝から食事をする国よ。あなたに災いあれ。

17 王が高貴な生まれで、高官たちがふさわしい時に、飲むためにではなく、力を得るために食事をする国よ。あなたは幸いだ。

18 怠惰になると天井は落ち、手を抜くと家は雨漏りがする。

19 食事を整えるのは笑うため。ぶどう酒は人生を楽しませる。銀はそのすべてに応えてくれる。

20 心の中で王を呪ってはならない。寝室で富める者を呪ってはならない。空の鳥がその声を運び、翼を持つものがその言葉を知らせてしまう。

《新改訳 2017》伝道者の書 10:16-20

16 わざわいなことよ、あなたのような国は。王が若輩で、高官たちが朝から贅沢な食事をする国は。

17 幸いなことよ、あなたのような国は。王が貴族の出であり、高官たちが、酔うためではなく力をつけるために、定まった時に食事をする国は。

18 怠けていると天井が落ち、手をこまねいていると雨漏りがする。

19 パンを作るのは笑うため。ぶどう酒は人生を楽しませる。金銭はすべての必要に応じる。

20 心の中でさえ、王を呪ってはならない。寝室でも、富む者を呪ってはならない。なぜなら、空の鳥がその声を運び、翼のあるものがそのことを告げるからだ。

【序論】

今日で 10 章を終えていくことになりますが、振り返りますと本章は「格言集」と呼ぶにふさわしい箇所でした。この「格言集」には一応「知恵ある者」「愚かな者」というキーワードがあるものの、内容的にはあまり一貫性がなく、語り手が伝えようとしているメッセージを聞き取るのに苦労したことしばしばでした。今日の箇所も三つの部分に分かれています（16-17 節、18-19 節、20 節）、実際にはこれらを一つにまとめるのは困難であることを初めにお伝えしておかなくてはなりません。厄介なのは、聖書の御言葉なのにほとんど宗教的なカラーが見出せない（「神」という言葉自体がまったく出てこない）ことです。しかし、そのような箇所であっても、静まって取り組んでいきますと、だんだんとコヘレトが伝えようとしている神の御心が見えてくるのです。神からのメッセージが書かれていない聖句は一つもありませんので、私たち読者が如何に御言葉に対して心を開いていくか、聖霊の働きかけを受け留めるかが肝心であります。

【本論】

三つの格言に以下のような小見出しを付けてみました。

- ①支配者層に対する怠惰の戒め（16-17 節）
- ②個人レベルにおける怠惰の戒め（18-19 節）
- ③支配者層を呪うな（20 節）

ここにはどうにか論理の流れを見出すことができます。結論を先取りするようではありますが、国の支配者層が墮落していると国民も影響を受けて墮落する傾向があるが、そのような風潮に流されることなく神だけを畏れて歩むべきことが教えられているようです。では、具体的に見てまいりましょう。

本論 1. 支配者層に対する怠惰の戒め（16-17 節）

王が若者で、高官たちが朝から食事をする国よ。あなたに災いあれ。王が高貴な生まれで、高官たちがふさわしい時に、飲むためにではなく、力を得るために食事をする国よ。あなたは幸いだ。（10:16-17）

ここには対照的な二人の王が登場します。「若者」と「高貴な生まれの者」です。「若者」と訳された言葉（נָעָר／ナアール）には、「少年」「しもべ」「青年」「家臣」などの意味があります。実際、イスラエル国家には 10 歳にも満たない子どもが王に立てられるようなケースがありました。例えば、南ユダ王国において、ヨシヤは 8 歳で、ヨアシュは 7 歳で王に即位しています。しかし、この二人の異なる点は、ヨシヤは終生神を畏れて徹底した宗教改革を行なったのに対し、ヨアシュは信仰の導き手であった祭司エホヤダが亡くなると墮落していったしまったということです。この二つの実例は、若くして王になることが直接国家の墮落につながるわけではないことを立証しています。

「ナアール」という言葉はむしろ、「未熟」と解釈されるべきでしょう。成熟した判断力を持ち合わせておらず、国は自分の思いのままだと勘違いし、あるいは腹黒い家来のおだてに乗って、いいように操られてしまう人のことです。このような傾向は必ずしも年若くなくても起こりうることでしょう。私はエステル記に出てくるアハシュエロス王（クセルクセス王）をその典型と見ています。彼は国家の繁栄に乗じて 180 日に及ぶ大宴会を催していますが（エステル 1:4）、それはおそらく国費によって賄われたものであり、本来は彼自身のお金ではないのです。そもそも、半年に亘って宴会を催す必

要などなく、そんなことをしていれば政治は滞り、敵国が攻め入る隙は透けて見える状態になるでしょう。当時の独裁主義的な王の権力はここまで愚かなことをなし得るものとしてしまったようですが、この王は家臣ハマンの悪巧みにも気づかず、寄留しているユダヤ人撲滅計画の書類に印を押してしまいました（エステル 3:8-13）。その書類にさえきちんと目を通していなかったのです。王妃エステルの介入によってどうにかこの危機は免れたものの、王の罪は重いでしょう。

「**高官たちが朝から食事をする**」というのも、これは朝っぱらから宴会を催していることを意味し、権力の座に居座って、ちゃんと政治を行なっていないことを表します。王が王なら家臣も家臣。誰も現実が見えておらず、その下で国民は生活苦に喘ぐ。そのような国は災いであるとコヘレトは言っているのです。

反対に「**王が高貴な生まれ**」というのは、何も世襲を意味するのではなく、王になるにふさわしい訓練を受け、精神的に成熟していることを表します。先のヨアシュ王は指導者エホヤダがいなくなると瞬く間に神から離れてしまいましたが、ヨシヤはそれとは違い、終生神から離れることがありませんでした。これは自立した信仰に立っているかどうかの違いです。神なしの政治は、バレなければ何をしていてもよいという気の緩みにつながり、不正がまかり通るようになるでしょう。神を畏れる支配者は、自分が神によって立てられているに過ぎない存在であることを認め、自分は人一倍重い裁きに遭うことを自覚してへりくだります。そのような国では「**高官たちがふさわしい時に、飲むためにはなく、力を得るために食事をする**」。これは、王に仕える者たちも、贅沢のためではなく、その日一日の労働のためにのみ食事をするという、健全な状態を表しています。

本論 2. 個人レベルにおける怠惰の戒め（18-19 節）

怠惰になると天井は落ち、手を抜くと家は雨漏りがする。食事を整えるのは笑うため。ぶどう酒は人生を楽しませる。銀はそのすべてに応えてくれる。（10:18-19）

ここまでは国家レベルにおける怠惰の戒めでしたが、ここからは個人レベルに移ります。一応の話の流れとして、支配者層が怠惰に生きているのを見て、じゃあ俺たちもそうしようと、庶民の生活にまでそれが波及することが言われていると読めるでしょう。ここでは「怠惰」という事柄が「家の管理」において説明されていますが、日頃から家屋のメンテナンスを怠っていると、だんだんとガタが出始めるのは当然のことです。破れが生じて放っておくなら、そこから侵食は進むでしょう。コヘレトはこのことを一つの「裁き」として描いているのですが、それは瞬時に訪れる裁きではなく、ジワジワと時間をかけてなされる気づきにくい裁きです。国の衰退が支配者層の怠慢（あるいは自分

たちの利益しか考えていない政治)によって徐々にもたらされるように、庶民の生活も丁寧な管理を怠っているところから災いを身に招くものとなります。

18 節で怠惰が戒められているのに対し、19 節では例によって飲食の楽しみが奨励されています。これはコヘレトの一つのテーマであります。この二つの節に一貫性を持たせるならば、しっかり働くところには生活における基本的な楽しみが与えられていくということが言われていることになるでしょう。稼ぎが少なかったとしても、金銭をよく管理するならば、その範囲内で生活を喜び楽しむことができる。そして、そのように生きるためには、他所^{よそ}のあり方を真似するのではなく、自分の懐具合をよく見極めなくてはならない。常に、神が自分にどれくらい与えてくださっているかというところを注視して生きていくことが大切なのです。この話の流れは 20 節へと続いていきます。

本論 3. 支配者層を呪うな (20 節)

心の中で王を呪ってはならない。寝室で富める者を呪ってはならない。空の鳥がその声を運び、翼を持つものがその言葉を知らせてしまう。(10:20)

大体、王や金持ちを呪いたくなる思いというのは、その贅沢な暮らしと自分の生活とを比較するところから生じてくるものでしょう。しかし、コヘレトは言います。決して彼らを羨んではならない。人は他人と自分を比較するところから不幸になると言われます。重要なのは、神が自分に何を与えてくださっているか。今ある立場、住まい、経済、家族、一つひとつをよく見て、それらを健全に管理し、育てていくことが求められている。

20 節では面白いことが言われています。支配者層を呪うと、その言葉を空の鳥が運んでいって伝えてしまいますよ、と。これは、日本語の「壁に耳あり障子に目あり」と共通する真理を含んでいる格言です。古今東西存在する戒めなのでしょう。強調されているのは「心の中でさえ」という部分です。私たちは、心で思っても口には出さないということをよくやっているのではないのでしょうか。しかし、コヘレトは言います。私たちは人を羨んだり妬んだりするマインドそのものを変えていただく必要がある。そういった負の連鎖から解放されなくてはならないと。これは主イエスの山上の説教とも通ずるところがあるでしょう。

あなたがたも聞いているとおり、昔の人は、『殺すな。人を殺した者は裁きを受ける』と命じられている。しかし、私は言うておく。きょうだいに腹を立てる者は誰でも裁きを受ける。きょうだいに『馬鹿』と言う者は、最高法院に引き渡され、『愚か者』と言う者は、ゲヘナの火に投げ込まれる。(マタイ 5:21-22)

主イエスが弟子たちに求めておられるのは、生き方の表面を整えることではなく、もっと根本的な「心」が造り変えられていくことなのです。そのような心の変化は、主の御霊に導かれる以外には起こり得ません。人は言いたいことを忍耐して言わないでいるということは多くの場面でしているでしょう。しかし、主イエスは怒りに捕われることそのものから私たちを解放しようとしているのです。この点において、コヘレトと主イエスの言っていることは一致しています。

【結論】

今日の箇所における支配者層とは、もっと身近な存在に置き換えることもできるでしょう。私たちの上に立つ人々のあり方がたとえ不甲斐ないものであったとしても、それに影響される必要はないのです。私たちが見るべきところは常に神です。神こそが私たちにとってのまことの王であり、すべてを与えてくださっている方であります。だから、「神のもの」を如何に管理するか、神に対してどのように生きているかに集中する必要があります。そこに集中するとき、人と自分を比べる余地はなくなるでしょう。私たちが見ているものをもう一度確認してみたいと思います。

【祈り】

万物を統べ治め給う神よ。私たちに与えられているすべてのものは、あなたから来ています。この人生において、管理すべきものが多くあります。それらを「自分のもの」としてではなく、「神のもの」としてふさわしく整え、増やし、お返ししていくことができますように。世の状況は移り変わり、私たちの生活もまた変化していきますが、どんな時にも悲観することなく、前を向いて、乗り越えていく知恵を求めていくことができますように。そして、あなたに信頼して生きる場所にすべては備えられるという体験を生ける限り味わわせてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

個人にも国家にも、ご自身の財源より分与し、管理する責任を与え給う、父なる神の愛、
「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に」返すことを教え給う、主イエス・キリストの恵み、

仕事も、家庭も、財産も、自分の体も、主のご用のために用いさせ給う、聖霊の親しき
交わりが、

あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。